

Andre Gagnon (アンドレ ギャニオン、カナダの作曲家)

この作曲家は結構ポピュラーな曲を作っている方なので、名前をお聞きの方は多くいると思いますが、その中でも最も有名な曲は「めぐり逢い (Comme au premier jour)」という曲でしょう。

優しいメロディーだから、初心者がピアノで弾いても優しいだろうという素人考えから、最近電子ピアノを買った孫娘に楽譜を買って送ってやろうと考え、久しぶりに出かけた甲府のイオンモールの楽器屋に入った。高い本棚に楽譜が並んでおり、どこを探すのか分からなかったそこで楽譜を探していた見知らぬ中年の女性に「アンドレ ギャニオンの楽譜を探しているけど、どこを見つけたらいいのでしょうか？」と尋ねた。

上品そうなその女性は、ぶしつけに問いかける変な爺さんに嫌な顔を見せずに「聞いたことないけどどんな曲の楽譜？」と聞くので、「多分カナダの最近の作曲家で、ムード音楽のような優しい曲を作る人だと思います。特に有名な「めぐり逢い」という曲の評判では、「おばあさんの葬式にその曲が流れてきて、涙が止まらなかった。」と書いてありましたが、私はもっと崇高なものを感じましたけど。」

彼女は興味を感じたらしく「どんな崇高さ？」と聞くので、少し恥ずかしかったけど「中学生だった頃、一度だけ話をした深窓の令嬢を思い出させるような、優しい音楽。ちょっと気障ですかね？」という、その女性はまじまじと私の顔を眺めてからにっこりして、真剣に本棚を探して、2冊の楽譜を探し出してくれました。

ギャニオンの「めぐり逢い」という曲は、5分もかからない小曲なのに、楽譜は2冊ともに厚い本だったので、その女性に丁寧に、その旨を告げ楽譜を本棚に戻し、お礼を言ってお別れしました。

折角、見知らぬ魅力的な女性と話す機会を逃したのは残念でしたが、それよりもがっかりしたのは、自分の文学的な表現力の貧弱さでした。

ある曲を聞いて、その音楽を文章にしようとしたとき、「きれいな曲」、「優しい」、「悲しい」などと抽象的な表現は出来るけど、その表現を聞いた人がその音楽を理解し、想像できるとは限りません。ある特定な曲を聞いて、その曲を文学的に表現出来たらどんなに楽しいだろうか考えてみました。例えば、何人かの聴衆に、何曲かを聞かせて、そこで朗読した詩がどの曲の詩かを当てさせるコンテストをやったら、その詩を作った人の表現力の技量が、正解だった人数でわかると思うのです。

ギャニオンの「めぐり逢い」を聞きながら、想像を働かせてある情景を思い浮かべ、それを言葉にしてみました。

「甲州、武州、信州の3州にまたがる甲武信岳を源流とし、笛吹川、富士川を経て駿河湾に注ぐ笛吹川の中流に、他の部分は急流なのに、ほんの5-6kmだけ流れが緩やかになっている所がある。この部分は川幅が広く、流れは大河の様相を呈している。春の夕暮れにこの岸辺を歩くと細やかな水音と優雅に水遊びをするシラサギなどの水鳥が集まっている場所がある。岸辺に腰を下ろしてこの鳥たちを眺めていると、東の山に沈み始めたお日様が最後の柔らかい光で自分を照らしてい。重い腰を上げて、今までいたところから川をさかのぼり暗くなり始めた川岸をゆっくり歩いて岐路についた。」

ここまで書いたものを読み直してその陳腐さに自己嫌悪に陥り、自殺しようと考えたほどでした。でも、とっくにわかっていたことですが、私には詩人にはなれないということに再認識しただけでもこの試みは成功だったと思うのです。

夜布団に入って、「めぐり逢い」の情景を、飽きもせずに思い出して、いろいろの言葉にしてブツブツと呟き、気が付くと、柔らかい毛皮の手触りと、ずっしりと重い娘のチー子の寝息が聞こえてきます。

詩人でなくてもいい、平和に年老いている爺で結構と思って、寝返りを打ちました。

完

2024年4月5日

奥山利雄